

## 「住宅」の社会学の回顧と展望

——団地研究を切り口として——

対話者：	倉沢 進
サポート：	首都大学東京 玉野 和志
企画者：	弘前大学 平井 太郎
	東京大学 祐成 保志
	東洋大学 西野 淑美
コーディネーター：	上智大学 芳賀 学

### 1 目的

本フォーラムの目的は、かつてコミュニティ研究の一環として集合住宅団地の研究を精力的に進めた都市社会学者の第一人者と、住宅に対する社会的アプローチを模索する若手研究者たちとの対話を通じ、日本社会学において一定の蓄積を有する「団地」についての経験的研究を回顧するとともに、どのように「住宅」の社会学を構想しうるか、その展望を開くことである。

### 2 概要

本フォーラムで討議の主たる対象とするのは、倉沢進を中心とする研究グループが1980年代におこなった一連の調査と、それらにもとづいて執筆された『大都市の共同生活：マンション・団地の社会学』（倉沢編 1990）である。これらの調査は倉沢の「都市的生活様式論」および「コミュニティ形成論」を、大都市・東京の集合住宅団地をフィールドとして経験的に検証しようとする試みであった。玉野和志ら調査に参加した研究者たちは、住宅階層論、下位文化論、集会的消費論、新しい社会運動論など新しい分析視角を意欲的に取り入れている。

本フォーラムでは、①団地研究の系譜と組織論、②調査と理論の相互作用、③政治と実践に対する研究の立ち位置という3つのテーマを中心に討議を進める予定である。

### 3 論点

まず、1950年代以降、都市社会学者と家族社会学者をはじめ多くの社会学者が関与した団地研究（祐成・平井・西野 2012 参照）における本書の位置を再確認したうえで、そうした現在からの回顧の妥当性を討議し、あわせて調査プロジェクトの組織論についても対話を通じて明らかにする。

次いで、英語圏における「Sociology of Housing」の成立と展開を、R.K.マートンらのクラフトタウン・ヒルタウン調査にみられたような1940年代の「社会心理学」的研究、および、新都市社会学や福祉国家論をふまえた1970年代以降の「政治社会学」的研究に着目しながら概観したうえで、経験的研究と社会学の諸理論の相互作用について「都市的生活様式論」と「コミュニティ形成論」を軸に討議する。

さらには、集合住宅団地の管理の現場やその制度設計にかかわる問題を議論する。居住者によるコミュニティ形成が集合住宅の良好な管理に資するという見解を前提としていた日本のマンション政策は、近年、「コンプライアンス」や「選択の自由」などの理念の下、転換を図られようとしている。こうした現状に対し社会学者がどのように関与しうるのか、あるいはすべきかについて、かつてのコミュニティ政策と社会学者との関係を念頭に置きつつ討議する。

### 文献

倉沢進編, 1990, 『大都市の共同生活：マンション・団地の社会学』日本評論社.

祐成保志・平井太郎・西野淑美, 2012, 「戦後日本の社会調査における住宅の対象化」『住総研 研究論文集』第38号.